

愛恵だより

「愛恵」の題字は初代理事長 三吉 保 氏による

解きにくい結び目は誰がほどくのか

日韓キリスト教社会福祉学会の交流「共に生きる共感プロジェクト」を支援して

公益財団法人 愛恵福祉支援財団
理事長 遠 藤 久 江

公益財団法人愛恵福祉支援財団の前身は1930年にアメリカの宣教師、ミス・ペイン氏によって創設されたセツルメントの社会事業に始まったので、これまでも国際的な視点で事業活動を行ってきました。この度は日本キリスト教社会福祉学会と韓国キリスト教実践学会との「共に生きる共感プロジェクト」への支援ができたことを大変喜んでます。韓国は隣国ですが、日本とは長い歴史において、「解きにくい結び目と絡んだ糸」(朴宋三先生の基調講演でのお話)の関係にあります。私たちもこの歴史を受け継ぐものとして、どのように韓国との関係を深めていくかが問われています。特に社会福祉という同じ分野で生きる者たちが、社会福祉の実践、研究の場において、未来の関係を見据えた交わりをどのように構築していくかは私にとっても大きな関心事でした。日本キリスト教社会福祉学会が中心になってこのような課題意識に向き合ったプロジェクトが実施されたことは意味あることであったと思います。

参加者にとっては今回のプログラムを通して、深く心を揺さぶられる経験をされたと思います。このプロジェ

クトのテーマにふさわしいプログラムの内容をつくり上げてくださったのは、日本キリスト教社会福祉学会の常任理事であり、国際委員会委員長でおられる、李善恵先生ですが、先生の韓国の関係者との強い信頼関係を抜きにしてはこの企画と実施は考えられませんでした。私も学会員ですが、李先生とご一緒にこのプロジェクトを進められましたことを心より感謝しています。

記念講演をされた朴宗三先生とはお親しい阿部志郎先生に朴先生のお元気なお写真を添えてこのプロジェクトのご報告をしましたところ、「日韓の交流が深まり嬉しいことです。特に愛恵が適切に支えていることは素晴らしいと思います。さぞかしペイン先生が喜んでおられることでしょう。」とのお便りをいただきました。また「韓国キリスト教社会福祉学会創立に、嶋田啓一郎先生御夫妻と一緒に参加しましたが、会長は金徳俊先生で嶋田門下でした。」とも記されておりました。このように二つの国の間に道を備え、整えて、着実な努力を積み重ねてくださった先達の後に、「今」があることを改めて思い至っています。



写真提供 韓国キリスト教社会福祉実践学会

「共感プロジェクト」を通して気づいたところ

李^リ 善恵^{ソンヘ} (関西学院大学人間福祉学部)

1) 本当のことを知ろうとする努力の大切さ

事実 (fact) に対する認識の差に葛藤が生まれることがある。事実とは「本当のこと」の意味をもっているものの、立場 (当事者、目撃者、誰から情報を得た者など) によって解釈が異なってくる。報告者の場合、誰から情報を得た者という立場として「家族史」から生まれた認識の差は無視できないと考えている。その理由は、植民地時代を直接に体験した親世代が当事者または目撃者の立場で次の世代に伝えるときの情報には、客観的かつ主観的な考えが含まれているため、事実に対する認識の差が生じることは否定できない。

過去にある先生から「韓国では日本が悪いと教育しているのか」という質問を受けたことがあり、その当時大きなショックを受けた記憶がある。なぜなら、日本が悪いと教育を受けたわけではなく、報告者には家族史の中に切っても切れない物語が存在していたからである。事実に対して考え方がそれぞれであると感じさせられた出来事である。現在、植民地時代を体験した1世代も少しずつ減っていく。1世代の話を聞いていた2世代が次の世代にどのように伝えていくかによって、おそらく日韓関係に影響を与える可能性があるだろう。

「臭い物に蓋をする」という言葉がある。日韓関係において向き合おうとすることより、とにかく蓋を閉じようとしてきた姿勢そのものが、現在の日韓関係において平行線をたどっている原因ではないだろうか。だからこそ、お互いに知ろうと努力する姿勢が、たとえ平行線でもその間隔を狭めて行くことになるであろう。もちろん知ったとしても何をすれば良いのかが分からない、今更私に何の意味があるかと考えている人もいるだろう。しかし、知らないままではいるよりも、知ることによってできることが生まれる可能性があるのではないか。今回の共感プロジェクトを通して、本当のことを知ろうとする努力の大切さをより深く学んだ。

2) 知ることによって生まれる理解が共感へ導いていく

理解するということは、相手の気持ちや物事を受け止めることから始まると思っている。また、相手が置かれた環境や状況を知ることによって、相手の気持ちが少しずつ理解できるようになり、その理解を深めていくことも重要であると分かった。

最近、世の中には黒白をはっきりとつけようとする傾向があると感じられる。自分と同じ意見であれば、味方だと認識し、異なる意見であれば、敵だと認識してしまう。しかし、これは狭い世界を作ってしまう近道なので、今からでもなぜそう思うのかを聞く耳が必要であろう。はっきり知ることによって相手に対する認識は変わってくると思う。

3) 共感することから平和を構築することへ

平和という言葉聞いたとき、真先に思い浮かぶのは「シャローム (shalom)」という言葉である。平和とは、単に戦争や紛争のない状態を指すものではない。自分自身の心の底からシャローム (shalom) と、「あなたに平和がありますように」といいながら、私が尊重されたようにあなたを尊重するという覚悟が平和に結びつけると考えている。

聖書には「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい (ローマの信徒への手紙 12 章 15 節)」という文章がある。これこそがまさに共感の第一歩ではないかと思っている。相手の立場で相手を理解して生まれた共感が、平和を構築する重要な入口となると考える。今回の共感プロジェクトを通して参加者一人ひとりがお互いを知り、そこから理解し合い、共感することで、平和が実現することになったと感じている。

共催・後援
公募事業

生きていること、生きていくこと、死んでいくこと

日本自殺予防学会総会・日本臨床死生学会総会

臨床の場における姿勢をめぐる全人的問題をメンタルヘルスの観点から学際的かつ学術的に研究しその実践と教育を行う

主催：日本臨床死生学会大会日本自殺予防学会

後援：愛恵福祉支援財団

日時：2024年9月13～15日

会場：埼玉会館(埼玉県さいたま市浦和)

2024年9月13日から15日の3日間、埼玉県さいたま市浦和の埼玉会館にて日本臨床死生学会が開催されました。今回は日本自殺予防学会総会との合同開催で、約600名の方々にご参加いただき、無事に終了することができました。

本大会では、「生きていること、生きていくこと、死んでいくこと」をメインテーマに掲げ、出生前の意思決定から児童思春期、高齢期における死生観、宗教や地域医療における死生観を学ぶことができました。また、日本自殺予防学会とのコラボレーションにより、あらゆる場面における自殺予防や自殺後のケアを学

び、安楽死と尊厳死についてディスカッションを行い、死生学教育についても検討することができました。

各会場では充実した講演・発表が行われ、活発な討論もあり、実り豊かな学会となりました。死生に関わる領域を扱うことは非常に重要であり、医療関係者のみならず、人文学、社会科学、心理学、哲学、法律など各専門分野の緊密な連携が不可欠です。しかし、わが国ではこうした取り組みがまだ十分とは言えない事も踏まえ、多くの方々に関心を持って取り組んでいたような死生学の重要性を学ぶことができた満足度の高い学会となりました。



スクールソーシャルワークを通じた中学生のメンタルヘルス支援

実施：Jugantor Samar Unnoyan Sangstha-JSUS (バングラディシュ)

後援：愛恵福祉支援財団

推進：Community Social Work Practice & Development Foundation(バングラディシュ)

この後援事業は、スクールソーシャルワークを通じた中学生のメンタルヘルス支援を目的としています。個人およびグループカウンセリングの実施、教師や保護者との協議会議、半年ごとのワークショップなどが行われました。

中学生のメンタルヘルス環境を評価するためのベースライン調査が実施されました。調査対象は生徒、保護者、教師であり、保護者の教育レベルや職業、ソー

シャルメディア利用状況、運動習慣、子どもとの関係などが評価されました。また、生徒の学年や性別、余暇の過ごし方、友人関係、メディア利用状況、喫煙やカウンセリングに対する態度なども調査されました。学校ソーシャルワーカーの役割やメンタルヘルス改善のための技術を学ぶための研修も実施されました。トレーニング内容には、学校におけるソーシャルワークの実践、ティーンエイジャーのメンタルヘルス改善のための呼吸法、ボランティア活動、社会福祉、社会事業、ソーシャルワークとソーシャルリーダーシップ、学校現場におけるソーシャルワーカーの役割、社会サービスと社会福祉実践の専門的関係、マインドマッピングとビジョン設定が含まれます。

助成事業

平和と調和のある未来を創造する人材を育む 国際相互理解推進イベント「The One」

主催：一般社団法人モザンビークのいのちをつなぐ会

テロ紛争の地から、日本の子ども、教員、NPOに携わる若者、一般市民に対して、平和と調和のある世界に近づく感性と知を伝える事で、共生意識を高め、善く生きる思考と行動へ繋がられる力を育むために実施されました。

学校や市民センター、コミュニティスペース等での多文化共生・共創、紛争と平和、国際情勢、真に豊か

な社会の基盤となる「一人ひとりの相互扶助力」の講義、スラムの暮らしかから生まれた音楽の生ライブが行われました。



助成金給付事業

2024年度の助成事業(限度額30万円/件)は、応募いただいた162件の中から計102件、2,534万円余の資金助成をすることができました。

備えて安心AED

特定非営利活動法人 ほのぼの朝日ネットワーク

AEDを購入し、グループホームに配備いたしました。ご利用者様、スタッフ一同、大変感謝するとともに、万が一の備えとしてAEDが存在することに強い安心感を感じております。



入浴用車椅子 介護負担の軽減!

特定非営利活動法人 まおり

入浴用車椅子の使用については、リクライニング対応であるためベッドで更衣動作を行い入浴用車椅子へ移乗し、直接浴室への移動ができるので、脊髄損傷の利用者様も安楽肢位で入浴が可能になり好評である。



ミニ耕運機 労力軽減 & 作業効率 UP!

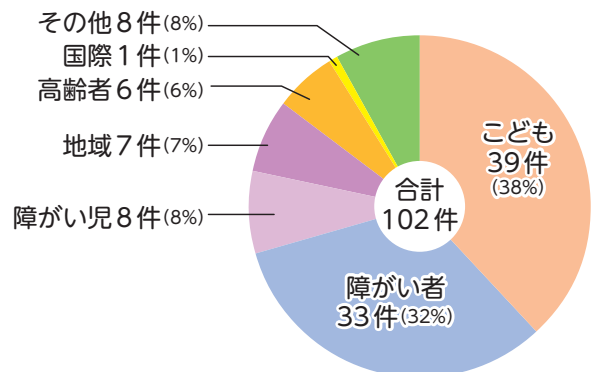
社会福祉法人 真誠会

耕運機により、下層の奥深くまで掘り起こしが可能となっており、今後のさつまいもの生育及び収穫に期待が出来るそうです。

春先になりましたら、広大な休耕地をこの耕運機を使用して農地拡大を図り、「地域活性化プロジェクト崎津夢農園」の更なる発展に期待したい。



2024年度助成金実績 分野別件数



2024年度 第26回 愛恵エッセイ賞 受賞作品集 発行

2024年度 第26回 愛恵エッセイ賞の受賞作品集が発行されました。

無償頒布いたしますので、ご希望の方は、財団事務局までご連絡ください。



愛恵福祉支援財団 案内図

JR駒込駅 東口より徒歩2分
北区中里2-6-1 愛恵ビル5F
電話 03(5961)9711

